きびのさと
NO.67
月刊
昭和三十九年一月一日発行
岡山県都窪郡吉備町東町一三五 宇垣方 呼電四三七
吉備観光協会

郷土の人物篇 (非売品)

○渡辺藤大夫信義

渡辺氏はその先祖は本姓源氏にして、渡辺綱から数代後の藤左衛門信興が始めて板倉氏に仕えて家禄五百石を領し、代々藩老の重職にあつた家柄である。信義は信興の六代の後ちである。徳川幕府末期の国事多端な頃に板倉摂津守勝弘に仕えて執事となり、扶持三百石を所領した。信義は武芸に長じ、殊に近代式火砲の術に精通していた。事蹟について墓碑に庭瀬藩の家老渡辺君が没して松林寺の先祖の墓地に埋葬した。寺僧の敬道和尚(後ちに應徳寺の住職となる)が家人の依頼を受けて来り、余に墓銘を乞ふて云ふに、君は誠実な人にして鋭に強し世人はその徳を稱揚するのみでなく、寺の檀那にして亦永く偽りのない人である。蓋し松林寺は板倉侯の公廟を奉じている。しかるに不幸にして香火のため往年(弘化六年の大災)伽藍が火災に罹り焼失してしまつた時、君は藩主の命によつて再建したがその費用は無駄がなく一厘も領民に累を及ぼすこともなくして荘厳な建物が出来して悉くその旧に復した。これは君の盡力によるものである。願はくば余の誌文を得たいということであつた。余はその話を聞いて、たましく思い、その感恩の深いことを喜んだ。今を距ること十年余、余が君に謁して火砲の術を問ふたことがある。君はくり返し、くり返しよく教えられ、また一日を費してこれを傳授せられた。その恩のありがたいことを感じ、今ここに依頼された墓銘をどうして断ることが出来ようか。君は偉迹の大なる人であつた。まづその履歴を叙すると、君は諱を信義といい、渡辺はその氏である。藤大夫は通稱で、号は竹操といつた六世の祖先は諱を信興といい始めて板倉侯に仕え後ちその国老に推され

続き

た。考は諱を信門といい、姐はた津見氏の出である。君は二歳にして孤となり、既に長じて地方にあること二十年、会々藩政多事を極めたので抜擢せられて始めて出仕して執事の要職についた。内外の要務は悉く取決し、その效績は大いに著われ扶持は三百石に進んだ。君は性質は正直にして温容、よく衆を愛撫し諸般武芸に暁通せざることはなかつた。最も火技に精通していたので一藩挙つて敬仰、慈父に過ふ心地であつた。これは敬道和尚が賢人として崇敬する由縁である。君が没する数日前、自ら起ざることを知り親族一同を集めていうに、死生は命である。なに風吹くば　実ら散る花も散るぞかしと。温然として逝去した。室は江木氏の出でありし秋の木葉の散るは時なりき、男二人、女一人をもうけた。末き竿(ケイ)という。男は皆幼少であつた。長子純が家嗣し、次子は出て支族を嗣いだのである。この碑文は山田方谷が漢文によつてあらわしている。信義夫妻の墓標は昭和三十年の春、世襲がどうなつているかの分祭祀するものが絶えたので今では無縁墓の数に加えられている。高さ九十四糎、二十八糎に二十四糎角の御影石造にして上部を神鉾形につくり、三日生に一文字の家紋をつけ

養賢院功誉竹操居士　　安政四丁巳年九月十日卒　寿五十五
隨光院貞誉智堅大姉　　明治七甲戌年二月六日卒　寿六十六

の法諡が刻んである。

火砲(鉄砲)の傳来は天文十二年(一五四三)に三人のポルトガル人が鹿児島の南方海上約四十粁の種子島に漂着した。村の長、西村織部丞がこれを連れて城主種子島時堯は所持している鉄砲を見て試みさしたのに、その威力に驚き家臣の八板金兵衛に命じて製法を習得させた。所が所心な箇所は会得出来ず困っているのをみて、長女若狭が不憫に思い、進んでポルトガル人の妻になり製法の伝授を受けた。若狭は十七歳絶世の美人であつたと伝えている。離島の時連れて帰られたが、年年白になって一度両親に会いたい、

と、いつわって島へ帰り、古卿が恵しく、ここで八枚金兵衛は娘は森で死んだという偽りの芝居までして、ポルトガル人をだました。実は若狭は七十歳歳まで長命したという。いま島の北部、甲女川のほとりに若狭の碑がある。立札に「月も日も大和の方ぞ　なつかしき　我が二親のありと思へば」。異国心望郷の思いをこめた歌である。また南端の門倉岬には大平洋に切りたつ絶壁の上の大きな自然石に鉄砲伝来の碑がある。

「鉄砲伝来紀功碑　従四位男爵　種子島守時　謹書」と表面に刻み、裏面に「之器古稱鉄砲者　今所謂小銃也云々」に始まり、約一千字に上る。これは文学博士　西村時彦の撰文で大正十年の建立である。西村時彦は西村織部亟の後裔である。

鉄砲による新武器は従来の戦闘方式に大変革をもたらしなければならないようになった。これを逸早く採用したのが織田信長である。天正三年長篠の戦いに甲斐の武田勝頼は有名な軍師、山本勘介の戦法を用い、織田、徳川の聯合軍と戦ったが、聯合軍側の鉄砲組になやまされ敗退を招いたのである。

その翌年織田信長が築いた近江の安土城の築城法は日本最初の天主閣といわれ、鉄砲の威力を考慮して造られたのである。

種子島伝来の鉄砲は種子島時堯が二千両で二丁の鉄砲を買い求めた。いま一丁だけ県指定文化財になって居り、それをまねて造られた国産第一号の種子島銃と共に種子島家に保存されている。種子島氏は平清盛の長子基盛の孫、信基が始祖で、時堯は十四代目に当り、当主は廿九代目である。歴代の墓所は西林にある。傍に三つの苔むした墓がある。これは関ヶ原に破れた小西行長の妹、永俊尼とその娘、孫のもので、キリシタン信徒なるが故に追われてこの島に流されて生涯を終った殉教の哀史が秘められている。(切支丹が伝来してから六年后の天文十八年である。最初は洛西にヨーロッパの文化が我国に入り、その影響は国民の思想にも広い世界観が現われ始めたが、これは後ちに鎖国制度で衰退したことは支配者篇、桜倉重昌の島原の乱の項で述べた)

○渡辺家系譜

渡辺家の家紋は三星一文字なり。但し末家に到り差別あり。源の渡辺当家の御旗は錦なり。上古は皆上蔦の御丑なり。其后頼朝右大将の御旗なり。其后頼朝の旗は頭黒三日月の旗なり。

時、頭黒十五夜月の旗を賜ふなり。又勝晋の二晋の弱なり。

嵯峨天皇―源融―敬代―綱。渡辺姓を名乗る―敬代―信興藤左エ門尉。高力隆長に仕へ番司となり禄三百石を賜い家督を継ぐ。高力隆長敗滅の後ち、京都に出で、初めて板倉内膳正重矩に仕へ、禄五百石を賜ふ。享保三癸酉年八月廿六日武州江戸に卒す。A

4 信頭　藤左エ門　家老禄五百石　庭瀬藩士　板倉重高、昌信に仕へ勝興の執事になる。宝暦十年十二月十四日庭瀬に卒す　享年一六十九才。

一信―信満―信門―信義。安政四年九月十日没　五十五才　室は江木氏。后室　毒松　酔茅の妹さよ　明治七年二月六日　六十六才。

純 B

隆　皎月院荻露忠隆居士　明治廿三年九月十三日　九廿四才。

(渡辺家累代の墓標は杉林寺無縁墓中にある。子孫は朝鮮に移住後も毎年祭事のこともあったが、昭和二十年大東亜戦争敗戦后音信不通となった。絶家したものと思われる)。

嚴　満州に渡り死亡すという。

英政　英相明晃童子　大正十年四月廿日卒　行年八才

英武　英相智願童子　大正十年五月七日卒　行年七才

△

元禄十六年、板倉家侍帳に筆頭家老として五百石渡辺藤左エ門(信興)。享保十四年侍帳に家老五百石渡辺藤左エ門(信興)。享保十四年侍帳に家老五百石渡辺思召によって御用人席国事掛三百五十石とあり。竹三郎は純の幼名で、安政四年父信義の後を継ぎ、明治三年廿二歳の弱冠にして、家臣中最高の禄を食んでいたことは、父君の功績によるものであろう。

純（キヨシ）　幼名竹三郎　嘉永元年八月十一日生　明治四十二年二月廿二日卒　年六十二才　通称院達道宗純居士　室は　やえ　小川甚雄の長女　明治五年九月十四日病死　十八才　后室　峰子　玄道院達峰妙善大姉　岡山の渡辺文太郎の長女　明治四十三年九月三日　晃島郡味野にて死去。行年六十有三才。B

男　某　支族を継ぐ

箏（ケイ）（女）

△

渡辺家の先祖の綱は武蔵源氏の箕田氏の出で渡辺郡（いまの大阪の地）に住んでいたので、渡辺姓を名乗ったのである。この綱は源頼光四天王の一人として驍勇をうたわれた屈強の武士である。毋波国大江山に棲む酒天童子の賊を退治したという伝説は、戦前の教育を受けた人は御存知のことと思ふ。また苅り龍之介の小説で有名になった羅生門は往昔渡辺 綱がこの門に出没する鬼神の腕を切り落したという説話でも有名である。この羅生門のあとは紀伊郡吉祥院村と鳥羽村の境界であって、今は京都市に編入されている。「王安朝の昔には皇城の西南の端に当っていた。いま羅生門遺蹟 京都市参事会」傍に「明治三十八年」と彫った高さ八尺ばかり、一尺角位の石標が寂しく建てられている。 物語は十世紀に逆る。

源頼光はこの羅生門に夜なく、鬼神が出没して怪異をなすということを聞き、綱にその実否を探らしめた。綱は命を受けて童代の鎧に、童代の太刀を佩いて、深更に羅生門の石階を昇り、金札に手をかけると、忽ち震動雷鳴して、門の上から一丈七尺ばかりの鬼神が現われ、綱の袴髪をつかんで二丈ばかりも空につりあげた。綱は太刀を抜く手もみせず、鬼神の腕を切り落した。鬼神は空高く一目散に逃げていった。綱はその腕を持ち帰り、頼光の前で検べると、指が四本にして紀鎌のような爪が生え、皮膚は青黒く銀の針のような毛が逆立ちして慓悍たる代物であった。綱はこれを石の唐櫃に入れて置いた處、すぐる晩摂津の国の渡辺に住む老母が尋ねてきて、その腕を見せてくれという、綱は欺かれるとは知らず、取出してみせると、老母は忽ち鬼神に変じて「確かにこれだ」と叫んで家の欄間から出て、破風を蹴破って雲に紛れて逃げ去ったという。 我国に鬼といわれる始めは八世紀の前期に書かれた日本最古の文献「古事記」の物語りに伊邪那美命は火の神、火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）を生んで陰にかかり黄泉の国（よもつくに）「出雲の国という」に赴かれた。伊邪那岐命は怖んで、そのあとを追ひ、伊邪那美命の姿をみると体中蛆に包まれて死んでいるので驚いて命は逃げ帰ろうとすると豫母都志許賣（よもつしこめ）が黄泉の軍を率いてあとを追いかけてきた。命は挑の実を三つ取ってなげつけたので（よもつしこめ）は驚いて皆逃げ去った。とある。この（よもつしこめ）を我邦最初の鬼になっている。故に猛猛なる荒々しい神様を描いていた。そこへ後世になって仏教が伝ってくると、恐ろしい姿をした夜叉や四維刹（法隆寺の玉虫の厨子に描かれているのが最古の鬼）をいい、また欲張りの人が地獄に落ちて餓鬼になるものなどが含まれて種類も形も多くなってきた。形容には耳まで口がさけ、鋭いキバや頭には角を有し、毛皮を腰に巻きつけ、神通力を持つ形に変った。平安朝後期には赤鬼、青鬼などの名も生れた。亡者が閻魔大王の裁きを

受ける時にはこの鬼が鉄棒をもって警護に当るのである。代表的な絵は地獄絵の鬼であろう。ホウソウやハシカの傳染病は鬼の仕業と考へられて非常に恐れられた。文学にも鬼に関した説話が数多く、特に平安朝末期の著書「今昔物語」は有名である。一般にはおとぎ話の桃太郎の鬼退治、大江山の酒天童子を討った源の頼光、ト隠山の鬼女を討った平家の大将維茂、それからこの渡辺 綱の討った四維生門の鬼であろう。しかしこの鬼も時代が科学化されて一般に親みを持たれ、各地に遺る民俗芸能の踊りに仕組まれ、また、節分に子供が喜ぶ鬼などは興味あるものである。

○

高木久太郎

久太郎は父を父右衛門といい、弘化二年一月十一日旗本町に生れた。高木家は屋号を川野屋といい譲造業を営む商家であった。明治三年五月十二日久太郎が廿六歳の時、父が五十六歳で他界したのでその遺業を継ぎ家運は次第に繁栄し、有数の資産家になった。日露戦争の終った明治廿八年に六十一歳に達したので家業を長子の広三郎に譲り隠居の身となった。久太郎は性格が温厚篤実であったので推されて町会議員となり町政に盡した。また神社仏閣に対しては巨額の費用を寄進し、困窮している町民には慈善の手を延ばして救済したので、其筋から褒賞として木盃を賜わったことが数回に及んだ。晩年は号を春雄といい、書画を友としまた古道具を愛玩し候々自適の生活を送り、大正七年一月八日七十四歳で逝去した。

久太郎に三男二女があったが二女とも夭折し、次男は出て田旗藩国老渡辺 桓の跡目相続した。広三郎は父の北台二代目久太郎を襲名し大正十一年二月八日五十七歳で病死した。広三郎に実子がなかったので末弟の清が家督を継いだが昭和廿二年に故あって屋敷と共に譲造業を波勢芳夫に譲り東京へ移った。清には子福なく兄の要次郎に生れた甥の正を養子として養子とした。正にまた実子がなく妻秋子の姪に当るイツ子を養女にしている。

大塚山にある高木家累代の墓碑をみるに、代々浄宗であるが、明治以后日蓮宗に宗旨替えしたようである。（第三編寺院篇了性山中正院参照）

大塚山にある高木家の墓碑

一、心院妙雅信女　安永六丁酉年四月十九日
仙学院周詣信士　文化八辛未年十月廿日　高木宗兵衛
伯山院妙秀信女　寛政四壬子年八月晦日

二、自照院青顕信士　文化元甲子年六月朔日　高木仲右エ門
照山院妙白信女　天保十寅年十月十五日　早島太田氏嫁和佐女

三、春静院鶴山信士　文政十二年五月三日　高木喜五郎
貞静院妙詣信女　慶應四戊辰閏四月十八日　同妻川人村脇本
作右エ門女き改　行年七十七才

四、秋月詠観信士　文化十甲戌年八月十九日　高木八十八

五、勇進院智道信士　文慶應四年辰四月十日　高木栄三郎
行年十八才

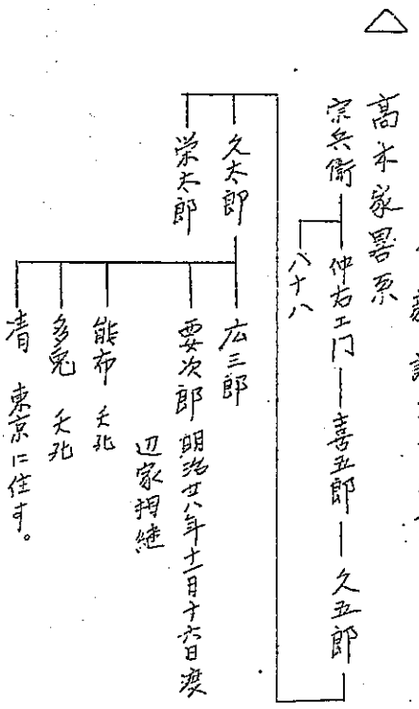
六、久遠院実櫂日諦信士　明治三庚午年五月十二日　高木久
五年　行年五十六才
華光院妙実日善信女　明治十四辛巳年八月十七日　同人妻
宮内浅治郎三郎妹　名益野
享年六十四才去

七、智輝日信孩女　明治十三庚申年七月朔日　享三歳
高木久太郎長女　能布墳

八、智光日清童女　明治十五壬申年四月四日　行三歳
高木久太郎三女　多免墳

九、実相院浄恵日顕居士　大正十年二月十八日　張二代高木久太郎
享年五十有七

実是院妙相日月大姉　上房郡高梁本町藤野儀平長女
妻貞　行年（行年なし　逆修による）



一、積善院弓男日徳居士
積徳院妙琉日輝大姉
高木君　諱春秀　稱久太郎　庭瀬人　老久右エ門　姚　渋沼氏　家世商賈　年二十六継先業　攻政　積年家道大興　室林氏　挙三男二女　俱夭　明治乙巳　以老隠　襲　孝稱久右エ門　長子広三郎　副襲　稱久太郎　君資性温厚　篤実　為衆所推挙　会議員　数次屢徹　金　奉神佛　恤窮困　事削　官賞賜　本盃　数回　晩年　容興自適　以書画古琉為樂　文正七年一月八日逝　距其生　弘化二年一月十一日　享年七十四
犬養　毅　譔文　并書

高木家墓原
宗兵衛 ─ 仲右エ門 ─ 喜五郎 ─ 久五郎
八十八

○　岩田半山翁

本姓は岩田宗平といい、万象軒半山はその号である。これは御上の先哲大養木堂翁の撰んだものである。半山の父きよ大熊勘七といい、旧撫川領主戸川氏の家臣荒木小太郎の弟にして大熊家に入りて宗十郎の養子となった。勘七には二男一女があった。長男き富太郎といい宗家を継ぎ二男の宗平は母方の質商を営む伯父の岩田秀太郎が逝去して岩田家が絶えたので岩田姓を冒したのである。宗平は明治廿年四月五日の生れで庭瀬栄町で荒物商を営む傍、四十歳の頃から余技として彫刻の技法を岡山の人、磯井某に師事して奥義を極め山先生について修得し、また漆塗は讃岐の人、諏訪五郎の息春政のその作品の優秀な技能は彫刻家として名をなした人である。

昭和四年四月廿五日文化美術工芸展覧会に出品し、同五年十一月十四日には今上陛下が岡山県下御巡幸の際献上の栄を賜わり嘉賞せられた。同九年五月三日全国工芸博覧会に、同十九年十一月廿六日岡山県工芸連盟展覧会等数多の展覧会に選ばれて出品し、丈々賞状を授与せられた。氏神八幡神社の懸額は半山の彫ったものである。偶昭和二十三年六月一日肝臓癌を患い日赤病院に入院したがついに癒えず六十二歳で他界したのである。

法諡　眞宗院勝憲居士

岩田家墓原

荒木小太郎
勘七大熊家相続
妻岩田武右エ門の娘　りか

宗平　岩田家相続
妻高橋善造の長女琴恵
女　某

富太郎　大熊家相続
定雄　大東亜戦争に戦死
博之　当主　住　栄町

計一　住　右島　三十四才

○　難波常蔵

常蔵は下撫川の西大橋、いまの一二六九番地横田　広の屋敷に住し屋号を玉屋といい、足袋の製造を業とし手広く得意先を有する資産家にして、田

畑も四、五町を所有し西向では指折りに数えられる地主でもあった。臨済宗應徳寺の門前に供養塔を建てたのはこの人にして、常に佛道に精進し適く諸國を巡礼した心身の修業に努めた。また慈善の心が深く五十数枚の額具を整えて巡礼者の訪れるものがあれば誰れ彼れの別なく一夜の宿泊をあたえて善根を施し寄附事には進んで醵出した。故に商取引にもこれが反映して栄え、道義を忘却した行動は更になく、眞面目に働いたので隣人にも信用が厚かった。殊に顧客に信仰の道を説きその先達となって巡礼を組織し、責上げの利得を還元し接待したので顧客みな非常に喜ばれた。これは陪度現今行なっている旅社が一年に一度得意先を案内して、遊覧旅行に招く方法と同じである。かように人望があったので商いは益々繁昌するのは当然である。西向に佛蹟巡礼の善風が遺っているのはこのためである。常蔵は商賣の取引上拈息な手段や恫喝的言辞を弄して賊を富えた銭から手や足がはえたような人物ではなかった。常蔵が寺社に寄進する布施は眞に淨財であったといえよう。また他人に恵與して記憶を忘れ、他人から恩恵を受けては忘れない性質であった。晩年にはその子に夫々資産を分配して独立の生計をたてしめた。一女美寿は岡山市二日市の佐々木弼平に嫁いだが、主人が早く没したので、その遺児と共に引取って筋向の所に別宅を建て自分もここに隠居して生涯を終ったのである。現在佐々木家は一二七番地に住しているが常蔵の直系筋は東京に住している。玉屋の四屋敷は人手に渡ったが南裏にもと榎の大樹があった。先年枯死してしまったが、その根元に小さな丸燒の祠がある。もと玉屋の鎮守にして御霊様と呼び、玉屋一統のものが歳次祭りを行っているのである。

玉屋雑波家の墳墓は数十基、應徳寺境内にある。常蔵の墓は実翁院常照居士明治三十丁酉年四月五日（行年七十歳）雑波常蔵親子之墳

△

雑波家系譜（玉屋）

雑波吉右ヱ門
月海宗円信士寛保三癸亥年八月十二日死 ― 某
妻 某
海岩妙潮信女寛保三癸亥年西月翔日死

某 ― 三兵衛
母岩自性信士文化三丙寅年十月廿九日死 ― 伊勢治良
妻 某円室妙性信女
文政八乙酉年八月翔日死

伊勢治良 ― A
徳岩宗善信士 弘化四丁未年二月廿二日死
妻 某徳室妙善信女 安政六己未年六月廿九日死

A
九三郎
精賀宜録信士 文政三庚申年八月翔日死
妻 里武 行年十有九歳

某 早死

槌五郎 中田村細蓮某養子 絶嗣

三次郎
常蔵 文政八年十月四日生 文政四年二月十五日死
妻 以志 早島沖新田村石井林八長女也

常吉 昭和五年五月十八日死 六十四才 絶嗣
伊勢次 昭和廿三年九月十五日死 六十六才 ― 勲 在下撫川
朋平 ― 勉 在下撫川

明治廿年五月一日生 七十三才
妻 以志 文政十年四月一日生 明治十三年九月五日死 享年五才

伊三郎 天保八年六月二日生 明治四十一年四月一日死 七十三才

嘉平 慶應三年四月廿七日生 昭和廿六年九月六日死 ― 久男 明治廿七年六月廿五日生 千葉川一三六七に住す

徳三郎 明治十九年六月廿一日死 ― 福六 絶嗣
美寿 安政元年十月廿二日生 明治廿七年三月廿五日死 ― 利一郎（在東京）
菊次郎 安政四年九月廿四日生 死不詳
妻 千代 文久二年十月十三日生 児島郡林村佐竹先三郎の長女
小虎
玉造 ― 四美（在東京）
小梅

（おわり）

吉備町平野 國道筋
電七七一 葬儀社
吉備局電四四番・有線七一〇番

糸 山陽線庭瀬駅前
用 整合名
莚 会
花 社 吉備整経所
吉備局電 18
有線 1808